

2012年5月5日(土・祝)

第1回 小松左京の西宮マップ

講師：かんべ むさし

## 『実(みのる)はいかにして左京になりしか』 かんべむさし

- ・小松左京は、小松左京として生まれ育ったのではなく、かくかくしかじかの時代、場所、家庭に生まれ、実(みのる)と名付けられ、実ちゃん、実くん、生徒、学生たる小松実として育ち、成長していったのち、小松左京になったのである。
- ・その視点で、心身に付与された特性、遺伝、環境、時代の推移等を概観していくと、小松左京が「いかに」「なぜ」「どのように」形成されたかがつかみやすいと思われる。

### [付与された心身要素。誕生]

- ・後年頑健な巨体となった骨太の肉体。(気力、体力、活力、スタミナ、パワーの土台)
- ・優秀な頭脳の家系。父親、兄弟、理科系の優秀者。(「脳」活力の遺伝&環境的な潜在)
- ・躁鬱気質の傾向。鋭敏な感受性、多感。(広範な刺激に対する「受け皿」として潜在)

### [生育環境と風土。幼児期～学童期]

- ・家庭内の文化的環境。読書、音楽、映画、伝統芸能にも接触。恵まれた階層育ち。
- ・父親、理化学関係の工場経営。兄との会話、教示等で科学方面にも興味や知識。
- ・誕生大阪、生育西宮。昭和10年前後の大阪～阪神間文化、その様相に原体験的に接触。  
(性格気質とこれらの環境があいまって、以下の戦中戦後「屈辱」「憤怒」「悲惨」体験を経てなお、人間「不信」よりは「信」のヒューマニスト、良きもの、美しきもの、高きものを求めるロマンチストでありつづけられた土台になったのでは？  
開高氏との相似→知識階級家庭。頭脳の優秀性。真善美を信じる。自己への矜持等々)

### [抑圧と不条理の戦中。神戸一中時代]

- ・軍国主義教育。戦争一辺倒。配属将校の横暴と教師の阿諛追従等による虐待的被害。
- ・その背景となって相手を激昂させた、自身の性格気質→ウカレ、友人を守る信義等々。  
(権力に対する反感。虎の威を借るタイプの人間への嫌悪。自分が思っているほどには「純粹」ではなかった仲間たちへの落胆等々を経験せしも、上記の「しかしなお」と)
- ・勤労働員。疲労と空腹。空襲による「死」や「死体」の日常化。破壊滅亡の実感予感。
- ・まともな授業を受けられなかったための精神的飢餓感(後年の「精神的胃拡張」へと)
- ・本土決戦による死を覚悟(近眼で非国民扱い。銃も持たせてもらえず竹槍で戦車を突けと言われていた。→弱者側に立った視点、弱者へのまなざし、優しさの発現契機?)
- ・広島の新爆弾。原爆であると兄から。空想が現実に。大量殺戮が可能になった衝撃。
- ・突然の終戦。「生き残った者」の思い。価値体系の崩壊経験。暴力教師の保身的激変。
- ・闇市体験。同年代の知人女性、強盗強姦殺人の被害者に。アナーキーな乱世を実体験。
- ・一方、沖縄では同年代の生徒(男女とも)が、前線で死んでいたという衝撃。贖罪意識。  
(価値観が大きくゆらいだ時代。阪神間文化で育った「ぼんぼん」にも、即物面観念面ともに、沈思、考察、判断を迫られる事象がどっとのしかかってくる)
- ・しかし同時に、中学では音楽、スポーツ、演劇等々、ウカレ的に多彩な活動。

### [解放と懊悩の戦後。三高～京大時代]

- ・三高時代。人生最高の日々。学問のおもしろさを認識。自由な環境。無茶な学生たち。
- ・京都の風土や人にも触れる。しかし学生改革で一年のみの旧制高校体験。  
(学術世界における「京都」の特異性。そのスタイル、活気、自由さなどの体験開始。  
某氏命名による「京大脳」の形成開始、「学際」的探究傾向の活性化?)
- ・大学は父親から理科系へと要求されるが、文学部へ。上記戦中戦後体験、原爆や沖縄の衝撃等々から、将来、「日本」と「日本人」を再考する作品執筆をと志向。
- ・核兵器反対の思いから、一時期、共産党で活動。文学のサークルにも参加。
- ・終戦による価値崩壊体験ゆえか、この時代、実存主義の影響少なからず。  
(第一次大戦後のヨーロッパ、その荒廃と崩壊に対する知識階級の反応に相似。後年の「無神論」的認識、宇宙史における個人の一回性という把握姿勢にも影響? 実存主義の概念規定を援用するなら、小松実(みのる)という現実存在=実存が、小松左京となるに至る本質をつくっていった、死ぬまでつくりつづけたとも)

### [労働と生活の現実を体験。卒業後～苦闘時代]

- ・大学卒業。共産党参加がたたって就職できず。多種多様な労働や仕事につく。
- ・仕事場所、活動場所としての大阪を経験。京大時代から、漫画家「モリミノル」として、大阪の弱小出版社とも接点あり。ともあれ、これで京阪神の三都を体験。
- ・生活変化と経済事情(結婚、父親の工場倒産)などから、日常不安定、未来不確定。精神の表層部では「荒れて」いた時代。売られた喧嘩は必ず買ったと。  
(ヒューマニスト、ロマンチスト、学際的探究者に、ナマの「現実」「金銭」「生活」体験が加わる。星さんとの「手形」談義←手形が落ちる落ちんを実体験した作家二人。  
結婚新居もアパートから開始。この時代に庶民感覚をたっぷりと身につける)
- ・しかし、科学、文学、諸学問の学術成果摂取、多様な芸術芸能の観賞吸収はつづける。経済誌「アトム」時代、湯川秀樹博士との対話はその象徴例。「京大脳」の進展?
- ・三高、京大、京大文学集団。この時期以降、仕事面で京都仲間に助けられること多し。  
(ラジオ大阪、産経新聞、小松左京となってからの「放送朝日」等々、京大人脈なり。  
後年、日本万国博以下、この京大人脈の「強さ偉大さ」は随所で活用されていく)

### [そして遂に、小松左京となる]

- ・断続的ながら作品は書いていた。高橋和己との親交も継続。しかし、まだ「はじけ」てなかったこの時期、海外のSF小説を知る(知らされる)。驚愕興奮し、前記した自己の文学的志向(義務感、使命感)、科学と文学の相互補完的並立または融合等々、すべてこの「SF」で対応できることを発見。視点、構成、設定、技法 e t c
- ・夫人のために書いた「日本アパッチ族」の原形、SFコンテストに応募した「地には平和を」、最初に掲載された「易仙桃李記」～。かくして、小松左京が誕生した。  
(それ以降の広範な活動のアウトラインは、ここまでの略図を製図用「伸縮拡大器」にかけてトレースすれば、近似值的に描いていけると思われる)



# 結婚

神言「中の客業をたまたまひ  
くまへマキマキ」劇団「歌舞座」  
の公演で女優を演ずるうちに  
になり、恋愛して来た女性と  
恋に落ちた」と噂されたこと

# 私の履歴書

京 左 松 小

みだが、私が二目見た瞬間  
ポーとなって二方的に惚れて  
しまったのだった。  
森本娘の「華々しき一族」  
は「女の一生」と並ぶ森本戦  
曲の代表作で、老境の映画監  
督の鉄風と妖艶な舞踏家、派  
訪の夫婦をそれぞれの連れ子  
など、多彩な登場人物が織り

なす人間模様を描いている。

諏訪役がいなかった。何し  
る「文学座」の杉村喜子の当  
たり役である。恋愛して来た  
のは子どもらしい女性ばかり  
り。ところが、たったひとり  
だけ例外がいた。

若いのに和服がとてめ似合  
って。着こなしても格に付いて  
いた。演出担当の私は「この  
人だ」と即断した。兵庫原涼

## 劇団の女優を口説く

妻の苦勞に創作意欲わく

種の出身で、下山京亮といっ  
た。諏訪役に決めるに同時に  
嫁さんにしてやうと勝手に決ま  
た。チャーミングな気立てが  
良々、羨しかった。

演技の筋も良かったが、彼  
女は二度と舞台に立たなかつ  
た。私が口説き落として嫁の  
んだしたから。結婚後、今でも  
チャーミングな妻に叱られ  
る。

昭和三十三年(一九五八年)  
十一月に式を挙げた。妻目録

の経緯は「マダム」を著め  
父の工場を継いでいたが、  
赤十字義演。借金返済に追われ  
結婚を借りの借金なんかない。  
父が息子代表させていた京

都の右濤水八幡宮の再婚所で  
挙げた。タタだったと感ず。  
私の着衣装はマホンのすそが  
短かった。妻の着付けも化粧

は兄嫁がした。親族だけの祝  
宴だった。披露宴は一カ月後、  
京大の文学仲間と毎日新聞社  
に入った右瀬朋夫と會面で  
やった。会費制だ。

新居は西宮・甲東園の大塚  
一間のアパート。工場はいま  
いも傾き、妻の嫁入り道具は  
ほとんど傾城に行った。建て  
直して奔走して、さあ、いかに  
ずいぶん酒を飲み、私の始  
りはいつとも午前。薄化粧で

彼のラジカセを贈るまで  
だった。

あの日のラジカセが部屋  
から消えた。「どうして部屋  
か」と思いつた。妻が不機嫌だ  
まりなへなされた。だが、妻を  
喜ばせようとは元手は何もな  
い。思い付いたのが小説だっ  
た。「マホンのマダムのよう



結婚式の記念写真

面白い物語を書くために「  
う」と決めた。

ヒントは大坂新聞の「大坂  
にアパッチ族現る」という記  
事だった。大坂城に近い、旧  
大坂砲兵工廠の周りに腐鉄泥  
棒が現れ、警察と激しい攻防  
戦を繰り返しているという。  
早速、書き始めた。アパッチ  
一族と呼ばれる腐鉄泥棒たち

は、ちやぶちやぶ「身鉄泥」  
に登場。大坂の「島から島  
に逃げ出して、鉄棒で遊んでいる  
物を千端から取り戻す」  
日本の政府や総務省や市民生活  
を悩ましていく……。

荒唐無稽なストーリーが次  
々をわいていく。原稿用紙に  
何枚か、毎晩のようにつづいて  
つづき合の上で書いて  
て工場には勤した。  
妻は面白くなって読  
んだ。近所の奥さん  
たむに見ても「鉄  
棒を盗むなんて、気  
色悪いわね」と評判  
が良かったらしい。

でもそれは目録かきで編纂を  
読むたが。意気に感じて尋  
いた。  
買入れしたと感っていたマ  
ホンの戻ってきた。実は怪盗  
に出していただけだった。そ  
の物語は後に私の出世作「日  
本アパッチ族」になる。作家  
小松左京誕生の功労書は書か  
った。(以下作家)